

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	23220006	研究期間	平成23年度～平成27年度
研究課題名	海のこころ、森のこころ—鯨類と霊長類の知性に関する比較認知科学—	研究代表者 (所属・職) <small>(平成28年3月現在)</small>	友永 雅己（京都大学・霊長類研究所・准教授）

【平成26年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準	
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる	
A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる	
○	A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
<p>(意見等)</p> <p>本研究は、霊長類（森のこころ）と鯨類（海のこころ）を対象とする比較認知科学により、人間とは何かを明らかにしていこうとするものである。霊長類に関しては、研究代表者らのこれまでの実績を基礎に多様な調査・研究が進行しており、期待どおりのあるいはそれ以上の成果が生まれている。また、研究成果の積極的な公表も行われている。一方で、霊長類と鯨類と比較認知科学的な検討は、本研究の最も期待される場所であるが、特に鯨類の研究は遅れ気味であるとの感を否めない。論文成果も霊長類が中心となっている。当初予定されていた研究員の雇用を進めることによって、残期間での研究体制が補強され、バランスのとれた研究成果が生まれることを期待したい。</p>		

【平成28年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、概ね期待どおりの成果があったが、一部十分ではなかった。
A-	<p>本研究は、霊長類の知性である「森のこころ」と、鯨類の知性である「海のこころ」を対象にして、こころの身体的制約と社会的制約の観点から比較評価し、人の知性解明にアプローチするものである。</p> <p>研究実績が十分に認められる「森のこころ」に対して、「海のこころ」については、観察レベルに留まるケースもあり、相対的に研究が遅れている。その結果、知性の比較や認知発達の変容に関する研究成果が不十分であると言える。</p>